

氏名	岡崎 倫子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第5685号
学位授与の日付	平成30年3月23日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目	Findings of Retrograde Contrast Study Through Double-balloon Enteroscopy Predict the Risk of Bowel Resections in Patients with Crohn's Disease with Small Bowel Stenosis (ダブルバルーン小腸内視鏡を用いた逆行性造影所見はクローン病の小腸狭窄病変の手術リスクを予測できる)
--------	---

論文審査委員	教授 藤原俊義	教授 八木孝仁	准教授 平木隆夫
--------	---------	---------	----------

学位論文内容の要旨

クローン病 (Crohn's disease; CD) 患者の小腸狭窄病変は、手術の大きな原因の1つである。ダブルバルーン小腸内視鏡 (Double-balloon enteroscopy; DBE) を用いた逆行性造影は、スコープが届かない深部小腸の状態をみるのに有用である。この研究の目的は、DBE を用いた逆行性造影が小腸狭窄のある CD 患者の手術リスクを予測する上で有用であるかを明らかにすることである。

2009年3月から2015年5月までの期間に、当院でDBEを用いた逆行性造影を施行したCD患者87例のうち、小腸狭窄病変のあった48例を対象とした。

検査後の観察期間は中央値2.4年で、検査後観察期間中に狭窄のために手術を要した症例は14例であった。多変量解析で、逆行性造影所見のうち、最大狭窄長 $\geq 20\text{mm}$ と最大口側腸管拡張径/正常腸管径の比 ≥ 1.4 が独立した手術のリスク因子であった。

DBEを用いた逆行性造影は、CDの小腸狭窄病変を評価する優れた方法であり、その検査所見は、その後の手術率を予測する上で有用であった。

論文審査結果の要旨

本研究は、クローン病 (Crohn's disease; CD) 患者の手術リスクを予測する上で、ダブルバルーン小腸内視鏡 (Double-balloon endoscopy; DBE) による逆行性造影の有用性を検証した後方視的観察研究である。

DBEで逆行性造影を施行したCD患者87例中、小腸狭窄病変があった48例を対象として観察期間の中央値2.4年で解析したところ、手術を要した症例は14例で、逆行性造影所見のうち、多変量解析で最大狭窄長 20mm 以上と最大口側腸管拡張径/正常腸管径の比 1.4 以上が独立した手術のリスク因子であることが明らかとなった。

本研究は、DBEを用いた逆行性造影がCDの小腸狭窄病変を評価して手術率を予測する上で有用な技術であることを示した点で、重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士 (医学) の学位を得る資格があると認める。